



本人の気持ち 家族の気持ち

認知症と診断されたとしても、本人も家族もすぐに受け入れられるものではありません。認知症になった本人は、自分に起こっている変化をどこかで感じながら、平静を装おうと努めます。「私は大丈夫」と話すのも、そんな気持ちの表れです。

家族もまた、そんな本人の姿を目の当たりにして、言い知れない不安を感じます。大きなショックを受けてしまう家族がほとんどです。しばらくして、治療はどのように進められるのか、これからの暮らしはどうなるのか、少しずつ考えられるようになるかもしれません。ただ、それもあせる必要はありません。時間をかけて、ゆっくりと受け入れていけばいいことです。

本人の気持ち



自分の身に何が起きているのか分からず、苦しんでいました。適切な治療や対応も分かりませんでした。

家族の気持ち



日に日に怒りっぽくなる姑に対して、ひたすら怒らせないようにかかわっていました。夜に寝てくれると緊張感から解放され、自然と涙が流れてきました。

本人の気持ち



確定診断を受けることで、できることがはっきりしました。病気による症状を知ることができました。目に見えない苦しみから少しだけ解放されました。病気だと言ってもらえたので、ひとりぼっちでがんばらなくてもよいと思えました。

家族の気持ち



病気と分かって治療も始まり、医師や周囲の人にも相談に乗ってもらえたので、これからはがんばれそうです。腹が立つこともあるけれど、病気がさせているのだから仕方ないと思ってやり過ごそうと思います。



認知症は どのような病気？

認知症とは、何らかの原因で脳の神経細胞が壊され、それによって記憶力などの知的機能が低下していく病気です。高齢者だけでなく、原因によっては、若い世代にも起こりうる病気です。



認知症の症状 1 (認知機能障害)

認知機能障害

● 記憶障害

本人が最も自覚しやすく、家族も気付きやすい症状です。初期の記憶障害は、忘れるというより、覚えられないという訴えが目立ちます。

● 実行機能障害

「何かをしようと思いつく」「計画を立てる」「順序立てて行う」「やり続けて、やり遂げる」など、新たな課題を実行に移す時に必要な能力が失われ、物事を実行することが困難になります。

● 見当識障害

時間、場所、人物の見当をつけ、自分の状況を理解する能力が障害されます。

● 失行

運動機能に麻痺などの障害がないにもかかわらず、以前はできていた「目的をやり遂げるための動作」ができない状態を言います。

● 失認

視力に異常がないのに、対象物を認識したり区別したりできなくなることや、人の顔が認識できないことなどを言います。

● 失語

認知症の初期に見られる失語は、物の呼称障害です。使用頻度の低い物の名前ほど出にくくなります。